五全総を探る

▽3△

得意分野で情報発信

岡山・加茂川町 国際貢献を推進

小さな世界都市

世界的な演劇祭「利賀フェスティバル」が毎年夏、富山県利賀村で開かれる。人口千百人。山間部の過疎の村が世界の「TOGA」に変わった。

世界各国から一万人を超す人が押し寄せる。お目当ての芝居を求め、伝統的な合掌造りやギリシャ風の円形劇場など、個性的な四つの劇場に散らばる。「芝居がはけても観客は自然の中で芝居の余韻に浸っていられる。村ごと劇場空間なんです。東京ではこうはいかんでしょう」。宮崎道正村長は胸を張る。フェスティバルはことし七月で十三年目を迎える。

利賀村を訪れる外国人は年平均千六百人。演劇の合宿で、米カリフォルニア大サンディエゴ校の学生ら数十人が毎年訪れる。薬草を干すおばあさんと学生が、利賀の方言と英語で会話をする光景も。民宿を経営する高畑兼敏さんは「過疎は止まらないが、いろいろな国の人が来るので人が減ったと感じない」と言う。

小さな市町村でも、利賀村のように特定の分野を磨けば世界に情報発信できる。国土庁はこうした「小さな世界都市」の育成を目指す。

「国際陶磁器フェスティバル美濃」を契機に伝統産業の陶芸の振興を目指す岐阜県多治見市や、「ラムサール条約締約国会議」を開催、自然環境分野で独自の地位を築く北海道釧路市の例もある。

人的交流で小さな世界都市を目指すのは岡山県加茂川町。町職員や町民を海外の被災地へ派遣、国際貢献するための条例を、今年三月に制定。手始めにどういう活動ができるかを探るため、旧ユーゴスラビアへ職員二人を視察に送った。また、推進母体となる住民組織「KIO（カモガワ・インターナショナル・オーガニゼイション）」に目標の倍の約百人の町民が参加、活動を始めている。

十八年前、劇団の早稲田小劇場（現SCOT）を引き連れて利賀に移住、フェスティバルを催した舞台演出家の鈴木忠志さんは「文化の国際化は友達づくり。そのためには時間やスペースをたっぷり使えることが不可欠」と言い、地方の条件のよさを挙げる。

「外から人が来るようになると、住民は地域に誇りを持つ。世界に目を向け、自信を持って挑戦するようになる。人のネットワークが広がり、新たなアイデアが生まれる」と宮崎村長。

特産のソバのルーツを求めて、車も入れないヒマラヤの奥地の村と姉妹提携したのもその一例。ネパールの絵師を招き巨大な曼陀羅（まんだら）を描いた「めい想の館」も造った。「世界中の人と楽しく交流できれば、一万人の町より幸せかもしれない」（宮崎村長）。

「世界は日本だけではない。日本は東京だけではない。この利賀村で世界に出合う」。利賀フェスティバルのスローガンは、小さな世界都市の目標でもある。

外国人と村民との交歓が盛んな富山県利賀村